

ヨーロッパの旅

平井信義

外国生活でノイローゼにかからないための予防法——このことについて私に忠告して下さったのはM氏である。M氏は五年余りのドイツ生活の中から、私の留学に当ってのはなむけとして、次の如く話されたのである。

「一つだけ、たとえばなしを申しませう。もしあなたがドイツ人の友人と一しょに下宿していただきます。そして仲よしになつて何でも話し合えるというようにな……そういう間柄になつたときでしょう。しかしながら、あなたがかりに病気になるということがあつてもその友だちがその日にドイツの約束がしてあれば、自分のドイツを捨ててあなたを看病するようなことはい——と覚悟しておくことですね。その友人は、あなたによい病院を教えることはするでしょう。しかし、ドイツのためにでかけていってしまうでしょう」

日本人ならば、目の前にいて仲よくしている友人の病氣となると、ドイツの約束を捨てても看病をすることになるだろう。友人の不幸を自分も不幸として感じて、心からの看病をする人もあろうし、ドイツへの氣持から半ば離れられないままに、折角の日に

病氣なんかしてと友人の病氣をいまいましく思いながらも看病にも精を出すという人もあろう。また、病人には同情しないが、もし病人をこのままにして出かけたなら、これからの交際がうまくいかなくなるかも知れないし世間が承知しまい——ということ、看病をする者もあろう。それが自己を満足させることにもなっている。いずれにしても、看病をしてくれることだけは期待できるのである。

しかし、それを期待したらドイツにおいては裏切られることがたびたび起こる可能性があるのだ。人に裏切られた時の淋しきはひどい。殊に異国においてはそうだろう。しかし、我が国で裏切られた——と思うようなことが、むこうでは普通だというのなら、裏切られたと感じたり淋しがったりするだけ馬鹿々々しい話となる。M氏の話をどのようにとつてよいのか、それがたとえ話であるだけに、私は「そんなものではすかねえ」と答えただけで、日本を出発してしまつたのである。

幸い私は病氣を一回もしなかつたので、病中の淋しさを味う機会はなかつた。しかし、フランクフルトからケルンに移り住み、

次いでO君が留学して来た時に、初めてM氏のたとえばなしに似たようなことが起きたのである。O君は、大学では私とは別の医局にいたので、昼飯の食堂で会う程度であったが、二三日彼の姿が見えないことがあった。どうしたかな——と思っているところへ、O君の下宿のおばさんから大学へ電話がかかって来た。O君がいま病気で、会いたいと言っているということであった。私は、とりあえずとんでいった。とり散らかした彼の部屋に入ると、熱がなかなかとれず、食欲がなくて困っている——と、彼は私の方に虚ろな目を向けて、大体の経過を報告した。

「いや、今度ばかりは参りましたよ。私の様子を知っていても、下宿の奴らは何一つしてくれないというわけでもなし、消化のいいものを——とって頼んだところが、手伝いの人を備ったらどうか——って言いやがったし、あのクソ婆って思いましたよ」

部屋の散乱——シャツは脱ぎっ放し、タオルは椅子からずり落ち、発汗をふいたのか手拭が二つ三つ転っていたし、食べたものは喰い散らかし、——という具合で、三日間の彼の奮闘を物語っているようであった。

「日本だったらねえ——と思いましたよ。下宿のおばさんが心配して、あれこれ面倒を見てくれるだろうし、入って来たらちょっとは片付けてでもくれるでしょうにねえ」と、彼は太い溜息をついた。たしかにそうだ、——殊に異国にいる人と思えば、その淋しさは身にしみてわかるだけに、日本の下宿ならば彼をこんな有様にしておくことは決してなかったろう。或いはうるさいくらいに面倒をみてくれるかも知れない。O君は、すっかりしょげてい

た。

それから三日間、私は彼のために薬を買ったり、消化によい食糧品を買って彼のために煮てあげたり、食べさせたりした。彼の病気は四、五日で恢復したが、それ以後の淋しきは一と入強くなったようであった。

下宿のおばさん——我が国では一種のなつかしい響きを持っていることばである。仙台にいた頃世話になった下宿のおじさんおばさんは、今は八〇歳を超えて元気でいるが、年に一〜二回は手紙のやり取りをしている。当時、嫁の心配までしてくれたおばさんであった。こんなことを思い出すと、ドイツの下宿のおばさんは、何と冷淡なのだろう——という気持が湧いてくる。しかし、本当にそうなのだろうか……。

第一、下宿という意味がちがうのである。我が国では、ここにかでも人間関係の存在が期待される。ところがドイツでは、部屋を貸し、その部屋に通ずる通路を通る鍵を与えてくれるのが下宿である。従って、一軒の家の一部屋であっても、我が国のアパートの一室の概念に等しい。貸してくれた人とは法的な契約だけで、人間関係を期待することはできないのである。O君の下宿のおばさんも、契約履行をしているのであって、それに人間関係を期待するのは、日本的な考え方を抜け出していない。第一、そのおばさんは自分の仕事を持っているんだ。だから、自分の仕事を裂いて彼のためにサービスすることは出来ない。親切の気持から、「誰か手伝いの人を——」と言ってくれたにちがいないし、それが精一杯の努力であったのだと思う。まして、他人の部屋を勝

手に掃除したり片付けたりできるものではない。仮りに時間があつてもそうしたことはしないだろう。

私は、M氏から聞いた話を、O君にも伝えた。しかし、日本から来たばかりのO君は、「ひでえ野郎どもだ」と憤慨しただけに終つてしまった。それもまた無理はない。三十五歳までじゅうぶんに日本の空気を吸ってきた人間が、直ちにドイツ人たちの間にある空気に馴染めるはずがないのである。また、我が国にみられる親切だって、どれだけ真実かわからない。ただ、そうした空気が存在するだけに、それを吸つたり吐いたりしてしまうのである。空気ということばが適当でなければ、日常生活の型とか、暮し方の型——というものがあつて、それに沿つて自分も行動し、その型を他人にも期待するようになるものである。

もし、そうした型を我が国から取り去つてしまえば、或いは多くの人がドイツ人のような行動をとるかも知れないのである。欧米人で日本へ来たことのあるものが、よく、日本人は親切だという。親しいなかななる迄もなく、一面識さえあれば親切にしてくれるという。ところが一方では、不親切だという声もきく。面識がなければ、例えば乗物の中であるとか道路などでは、すこしも親切にしないのが日本人——ということも言われる。面識ということが重要であるとすれば、それは或いは利害関係が裏にひそんでいるような親切が多いのではないだろうか。乗物の中で、席を譲るのは主として知人である。少しでも自分の目上のものであれば、その人が若い男の人であつても席を譲るが、見知らぬ年寄りには席を譲らない——となると、日本人の親切には主として

面識が前提となり、その裏には功利的な気持が動いているのではないだろうか。

それよりも、自分の思った通りに行動すること——それは我が国ではドライと言われるかも知れないが、従来のうわべだけの人間関係を打ち破つて、新しい人間関係の型を生み出すには大切なことなのかも知れない。本当にその人のためのことを思つての行動——それが口先だけでなく、どの人のためにもそうした行動がとれるような立派なところの持ち主になることは大切なことであるが、それがうわべだけのこと、すなわち型だけのことであり、それは功利的に用いられ、親分子分とかそうしたものに発展していく可能性がある。

さて、我が国の両親にせよ保育者にせよ、子どもに対して、「他人への親切」ということを考えるときに、どのような意識を背景として、どのような行動を望んでいるのだろうか。自分のことを犠牲にして、内心はイヤだなあ——と思ひながらも、他人のためにあれこれと世話をやくようなことを求めているのであろうか。こうした行動は、今の年寄りたちには常識となっている。内心の思いを面に出すようなことをすれば、年寄りからは薄情な人間だと言われてしまうだろう。しかし、内心のイヤだなあと思う気持が強いときに、さも親切らしい行動をしたとしても、恐らく、内心の不快さをぬぐい切れずに悩むものも出てくるにちがいない。そうはいいいながら、自分がその立場におかれたら淋しいと思うことだろう——と考えると、些かの同情が湧いてくることだつてあるのだ。

こうした時に、どのように割切って行動するか、世間一般の型に従って行動するか、ドイツのような社会もあると思いきめて、自分の思った通りの行動に出るか、或いはその二つを超えた新しい方法を生み出すか……。親切にする——ということ一つをとってみても、おもしろい問題が横たわっているし、それらをどう考えるかによって、子どもの教育にも大きく影響してくるのである。

私自身、ドイツに生活していて、淋しい思いをしなかつたわけではない。いや、淋しい思いの連続であつたということもできる。急に雨の降りだした夕方、家に帰るにも傘はなし——ということ、病院の玄関に立って両足を眺めていたことがある。そこへ、同じ医局でよく顔を合わせるエバーベック氏が通りかかつて言った。

「雨が降りますね？」

「急に降って来ましたね」

「ではさようなら」

「また、明日」

そして、彼は自分の自動車にエンジンをかけると、私に白い煙を見せたまま、乗り去ってしまったのである。日本でならなあ——という感傷が湧いてきたが、いやいや——と慌てて打ち消したのである。彼には、ちょうど時間でいかなければならない用事があるかも知れない。奥さんが食事の用意をして家で待っていることであっても、彼としては大切な家庭の営みを実現する上で必然的なことなのだ。或いは、どこかへ往診に行くのかも知れない。私の下宿まで——その下宿の場所を彼だつて知っているのだ

が——自動車ならば五分の距離であつても、彼にとってはその五分が大切なことなのかも知れない。或いは、「乗せていってくれ」と卒直に話をすれば、その気になったのかも知れない。乗せてくれと言う卒直さがなかつたのが悪いことだと言えば悪いのだ——と私は考えた。彼自身としては、或いは、私が両足を眺めているその姿を尊んでくれたのかも知れない。

人の気持を汲んで——というのが我が国のつき合ひの方法である。それが先廻りしてうるさくなるのが非常に多い。客に茶菓をすすめた時、「もう結構です」と相手がいったとしても、本当は欲しがっているにちがいないと勘ぐるのが我が国の交際とか親切の型となっている。子どもが「もういらないよ」と断つても、「そういうものではありませんよ」とその失礼をなじるのが母親であり保育者ではなかるうか。

私自身、西欧の社会で生活するうちに、他人を勧めることは少なくなってきた。そして、きらいなものを嫌いといい、雨の時に「乗せていって欲しい」というものを自動車にのせ、私自身も乗せて欲しい時にははっきりと「のせてくれ」といい、他人がその人の都合で行動すればその人の都合があるからと思う——そういうことが出来るようになってから、あとから、他人が勧めていたことを知ると、驚きもし、且つ何か悲しいものを感じるようになった。

新しい日本人の悩み——といったらよいのだろうか。そして、このことは、子どもの教育とか人間関係・精神療法などを考える上に、大切な要素だと思ふ。